

『序章』10号・11号(1973)

『歴史と階級意識』の批判 上

榎原均

このルカーチ批判は、七一年の五月から七月にかけて執筆したものである。執筆中、ルカーチの死の報に接し、氣勢がそがれたことを記憶している。

当時ルカーチの批判をとりあげたのは、革マル派や中核派にとどまらず、旧ブンドや関西ブンドも、ルカーチの思想に依拠しており、旧ブンド以降のいわゆる新左翼運動も、思想的には、第二インターナショナル左派の枠に入っているのではないかということが、次第に明確になってくるなかで、新左翼運動のいくつかの党派の立脚点の基礎となっているルカーチの思想が、内面的に批判されねばならないことを感じたためである。

ルカーチの思想は、非常に多面的であり、革マル派は、その労働力商品化論から階級意識論に立脚し、それを自覚の論理へと純化させており、一方中核派は、『レーニン論』の「革命の現実性」や、『組織論』に依拠しており、かつての関西ブンドもルカーチの『組織論』に依拠してきたのであった。

ルカーチに対する批判は、第三インターの理論家達や、日共の学者からの批判があるが、これらに対する検討は、必要だと思われるが、ここではふれられていない。

ここでは、ルカーチの資本主義批判の誤りを明らかにし、このことを基礎にして、彼の階級意識論や、党組織論を点検してきたので

あるが、とくに、プロレタリアートの経済的地位に関して、若干舌足らずの感があるので註として、説明と、参考文献を付加しておいた。

七二年十一月

(一) 「物象化」論はプロレタリアートの経済的地位を正しく分析出来ない。

ルカーチは、その著『歴史と階級意識』のなかの、「物象化とプロレタリアートの意識」の冒頭に、次のような問題提起を行なっている。

「商品の問題が資本主義社会の生活現象すべてにわたっての中心的・構造的な問題としてあらわれてはじめて、問題が一般的な性質をおびてくるのである。なぜなら、われわれがこれを資本主義社会の構造的な問題として提起してこそ、商品関係の構造的なかに、ブルジョア社会でのあらゆる対象性の形態と、これに対応する主体性の形態との原形を見つけたことができるからである。」(『歴史と

階級意識」以下「歴史」と略記す。P八・未来社版)

この問題提起のなかに、ルカーチの理論、とくに物象化論の核心は言いあらわされている。商品化されたプロレタリアが、商品関係に組みこまれることによって、対象化の形態を強制されるとともに、一方彼の内部に存在する人間としての主体性と分裂がはじまり、かくて、プロレタリアは自己を商品として認識することをその端緒として、階級意識にまで高まる必然性にあること、このことがルカーチ物象化論の中心テーマである。このルカーチが追求した核心的内容を明確にした上になつて、われわれはルカーチが、どのような論理的道すじを通して、このテーマを解明していったかをまずもって検討してゆくことにしよう。このような体系的批判が必要なのはルカーチのこのようなテーマの設定と解答の仕方が、多くの物象化論の中でも最も古く、かつ体系的に強固であり、今日においても、その影響を保持しているばかりか、それが、第二インター最左翼としての過去から袂別し、レーニン主義をヨーロッパ的視角から総括しようとした試みのうちの第一級のものであるからである。そして、われわれはいまや、このルカーチの試みを失敗したそれとして総括しうるのであるが、しかし、ルカーチの提起は失敗作として単純に退けられる性格のものではなく、自らその思想と格闘して、内在的に克服してゆかねばならないものとしてあるからだ。というのは、他ならぬルカーチの提起は主観的には労働力商品所有者意識の枠組みを突破しようとしつつも客観的にはそこにどまっているのであり、われわれの思想闘争の中心問題がそこに存在しているからである。

さて、ルカーチは、最初の問題提起から出発し、まず物象化の現

象を考察している。それは、「経済の物象化」「政治の物象化」「イデオロギーの物象化」として展開されている。われわれの言葉で言うならば、ルカーチの「資本主義批判」がここに述べられているのである。

「すでにたびたび力説されてきたように、商品構造の本質とは、人間と人間との関係またはかわり合いが物象性の性格を、こうしてまた『幻想的な性格』をおびており、そしてこの物象が外見上は完結した厳密な合理的な独自の法則にしたがつているなかで、物象性の本質である人間関係の一切の痕跡はかくされているということ、これである。」(『歴史』P九)

ここではルカーチの物象化論の枠組みが提出されている。第一に、商品構造の本質が「人間と人間との関係、またはかわり合いが」物象性の性質をもつこととされる。第二に、この物象化された関係は、「外見上は完結した」独自の法則にしたがつるものとして、現象することであり、第三に、「物象性の本質」は、人間関係であるとされていることである。

とりあえずここで、このルカーチの物象化論の枠組みそのものの狭さ、誤謬をあげておこう。第一にルカーチは、物象化の根本問題を「商品構造」として問題を提出した結果、その本質として説明されている「人間と人間との関係、またはかわり合い」が、商品交換者の関係に極限されてしまっていることである。第二に、それゆえ、階級の問題を解明するための必須の条件である、商品生産、それも、資本制の生産様式の内的作用の解明に一切立ち入ることが出来なくなっていることである。だから、第三に、「物象性の本質」を人間関係に求めながらも、それが、資本、賃労働の関係を分析した

上での階級関係として、労働力の商品化を「流通に属する仮象」として把握するといった視点は全く欠落し、プロレタリアートの商品化と人間性の分裂といった内容を提出するにとどまっていることである。このように、ルカーチの物象化論の枠組みは、資本の生産過程の分析を捨象してしまっているがゆえに、根本的な欠陥をもっていることがまずもって明らかにされねばならない。そして、ルカーチの以降の展開も、この欠陥によって貫かれていっているのである。

ルカーチは、物象化を、まずもって「この商品関係の神秘化によって、人間個々の活動である労働が、なにか客観的なるもの、人間から独立しているもの・人間とは無縁なそれ独自の法則で人間を支配するもの」として、人間に對立させられる。(『歴史』P一五)というように把握し、「資本論」の「第四節 商品の物神的性格とその秘密」から大幅な引用をしている。そして、その言わんとするところは、商品構造の本質は、相互に独立した私的労働生産物の関係であるということなのである。次にこの商品関係の神秘化の内容と同じ平面でもって、ルカーチは、労働力商品をも解明しようとして努力している。マルクスが資本の発生の条件としての「自由な労働者」にふれている部分を引用しつつ、ルカーチは次のように言う。

「このようなわけで、商品形態が普遍的になると、主観的な点でも客観的な点でも、商品に對象化された人間労働の抽象化という現象が生じる。」(『歴史』P一六)

「労働過程が合理的になると、経済過程の主体と客体について決定的な変化がおこるのだが、この変化には次の二つのものが考えられる。まず第一に、労働過程が計算できるものになるためには、それはつねに質的な規定をうけている有機的・非合理的な生産物その

ものの統一性と決裂しなければならない、ということである。……つぎに労働過程の合理化がひきおこす第二の変化については、上のような生産の客体の分裂は、同時にかならずその主体の分裂を意味するということである。」(『歴史』P一八―一九)

このようにルカーチは、まず「人間労働の抽象化」を論じ、その現実的基礎を労働過程の発達に求めてしまうのである。そして、合理的な労働過程の形式を、労働者の生産手段からの分離に求め、そして、この第一の分離に基礎をおいて、次に、労働主体そのものの分裂を論じているのである。

かくて、ルカーチの冒頭の問題提起にあったところの「商品関係の構造のなかに」対象性の形態と主体性の形態は導き出されたのであった。それは労働主体の分裂として説明されるのである。ルカーチは、「自由な」労働者の、機械への従属や孤立化、原子化の現象をあげた後、「もちろんこのようにして成立する孤立化と原子化とは、単なる仮象である。」(『歴史』P二四)といっている。そして、商品構造と、その構造のなかでの諸法則が、仮象の内実とされる。

「われわれが強調してきたように、ここでは労働者は自分の労働力という商品の『所有者』としてあらわれねばならない。しかも労働者の独自の立場はなにかといえ、それはこの商品となった労働力がかれの唯一の財産だという点にある。このような労働者の運命を手がかりにすると、自己客体化つまり人間の活動の商品化が、非人間化された・非人間化をつくりだす商品関係の性格をきわめて端的にしめしているのであり、そしてこの事実が社会全体の構造を典型的にしめすのだということがわかるのである。」(『歴史』P二五)

このように、労働者が、商品構造のなかでしめる位置から、社会

全体の典型的な運命を左右するものであることが説明される。物象化の根拠を、「商品構造」に求め、その本質を「人間と人間との関係」として把握したルカーチは、「商品構造」そのものは、合理的なものとして把握してしまっているものであり、そして、この「商品構造」の眼からプロレタリアを見ていることによつて、資本の生産過程の分析から明らかにしうる階級関係を把握しえず、「人間の活動の商品化」が、階級闘争の根拠であるかの如く見えるのである。

さて、これまでのところでわれわれは、ルカーチ物象化論の枠組みを検討し、それが「商品構造」に固執したあまり、プロレタリアを「商品構造」商品交換関係の眼から見たものでしかないことを明らかにしてきた。これは労働力商品化論の一変種であるが、このルカーチの資本主義批判が、「商品構造の本質」としての人間関係をどのように提出しているか、(そしてこのことが他ならぬルカーチの階級に対する把握になるのだが)が次に明らかにされねばならない。

「これまでみてきたように、商品交換関係が『幻想的対象性』をもつ物へと転化することは、欲望充足の対象全体が商品化するというだけのものではない。さらにこの転化は、人間の意識全体に対象性の構造を押しつけるのである。すなわちそこでは、人間の特性と能力は、もはや有機的・統一的な人格に結びつかなくなり、人間がさまざまな外界の対象とおなじく『所有し』『譲渡する』ところの『物』となるのである。こうしておのづから、人間相互の関係のなんらの形態もなく、人間は自己の肉体的・精神的『特性』を發揮できなくなり、むしろこれらの特性はしだいに対象性の形態に從属することになるのである。」(『歴史』P四一)

——目前の——自立性およびそのために生ずる硬直性が、現実に止揚されるのである。」(『歴史』P一三五)

少し長くなるが、ブルジョア思想の総括をも含めたルカーチの歴史的生成の立場について引用しておこう。

「古典的哲学はたしかに、自己の生命根拠のあらゆる二律背反をば自己の達しうるかぎりの究極の思想的頂点にまで押しすすめ、そして最高度にこれを思想のうえで表現したのであるが、しかしこの二律背反はやはり古典哲学の思惟では、解決されもしなければ、解決できもしないのである。したがって発展史からみて古典哲学は矛盾した状態におちいったのであって、それはブルジョア社会を思想的に克服し、そしてブルジョア社会内部でまたこの社会によつて否定された人間を思弁的に復活することを目的としながら、その結果はといえば、単にブルジョア社会を完全に思想的に再生産し、先験的に演繹することにおわつたのである。ところで、この演繹の仕方である弁証法的方法のみが、ブルジョア社会を超越させるものなののである。にもかかわらず、この弁証法的方法は古典哲学そのものなのなかでは、まさに解決されもしない二律背反の形態をとるのである。そしてこの二律背反こそいうまでもなく、ブルジョア社会の存在の基礎にあり、この社会によつて——もとよりいよいよ混乱し悪化する形態で——生産し再生産される二律背反をばきわめて深くまたうまく思想的に表現しているのである。したがって、古典哲学はその後の発展に、この解決されない二律背反を遺産として残すことができたのである。ところで、この古典哲学の道を転回させて、すくなくとも方法的にブルジョアの限界を超越しはじめたその方法をひきつづき推進していくことは、とりもなおさず、歴史の

ルカーチは物象化の問題を、単に生産物の商品化という次元にとどめず、人間の意識にまで波及させ、政治の物象化を論じている。そして、人間相互の関係のなんらの形態もなくなるものが強調されている。そして、このように一見合理的に社会全体を把握しように見えが、それは仮象にすぎず、全体の「合法則性」と部分のそれが原理的に異なっていることが、資本主義生産の特質とされる。すなわち、「あらゆる個別の現象の厳密に法則的な必然性と全過程の相対的な非合理性とが相互作用するところに、資本主義生産の構造全体の基礎があるのだからである。」(『歴史』P四四)とされるのである。そしてこの全体の法則性と部分の法則性との関係は、次のように説明される。

「ただこの全体にたいする『法則』は、一方では、相互に独立した個々の商品所有者の独自の活動の『無意識的な』産物、したがって相互に作用しあう『偶然性』の法則なのであって真に合理的な組織の法則であろうはずがない。」(『歴史』P四五)

ここに見られるように、「商品構造」商品交換関係から出発したルカーチは、その本質としての人間関係に関して、結局、「相互に独立した個々の商品所有者の関係」としてしか述べることはできないのである。だがこのことから、プロレタリアの経済的地位を語ることはできないのである。

このように、「資本主義批判」の地平でゆきづまってしまったルカーチは、当然にも、現実の土台から離れざるをえない。彼は、次に、ブルジョア思想の総括にうつり、近代合理主義の二律背反を論じ、その矛盾の止揚として、「歴史的生成の立場」なるものをもちだすのである。「歴史的生成によつてはじめて、事物と事物概念の

方法としての弁証法的方法を徹底させることである。そしてこのことこそ、主客の同一性、事行の主体、あるいは發生の『われわれ』なるものをば、自己の生命の根拠から自己のうちに発見できた階級、すなわちプロレタリアートにあたえられた課題なのである。」(『歴史』P四二)

要するに、ブルジョア思想の二律背反の基礎が、ブルジョア社会にあるとされ、そして、このブルジョア社会の二律背反は、歴史的にしか克服することが出来ず、そして、この歴史の担い手がブルジョア社会における主客の同一性を体現するプロレタリアートにあるとされるのである。

すなわち、「商品構造」といった観点からはプロレタリアートを、商品化・客体化した人間、主・客の分裂としてしか把握しえないうえに、この、主・客の分裂から階級闘争を説明せざるをえなくなつたルカーチは、「歴史的生成の立場」なるものを導入せざるをえないのであり、そして、この歴史的生成の担い手を、主・客の同一性を体現しているプロレタリアートに求めたのである。ここから、「プロレタリアートは社会及び歴史に対して特殊な態度をとり、本質的に社会的・歴史的発展過程の主体と客体との同一性としての役割をもつ立場に立つのである。」(『歴史』P一四七)といったことが主張されるのである。

これまでの内容をまとめるとすれば、ルカーチの物象化論は、商品関係の構造のなかに資本主義社会の生活現象すべてにわたつた問題のみよつとしたのである。この商品構造の本質とは、人間と人間との関係が、物象性の性格をおび、この物象が、外見上は完結した合理的な独自の法則にしたがっているようにみえるが、それは、実

は仮象であり、物象性の本質は、人間関係にあるとされるのであった。ところで、このような「商品構造」の観点からは、商品交換の背景にある相互に独立した私の商品所有者といった人間関係しか明らかにはしないのである。そして、このような人間関係は、決してプロレタリアートの経済的地位を明らかにするものではないのである。にもかかわらず、このような人間関係の解明でもって、プロレタリアートを解明しえたと考えているルカーチは、当然にも、この人間関係（商品所有者の関係）を出発点にして、階級闘争を論じようとするのであるが、その場合、プロレタリアートの経済的解明がなしえなかつた代りに、その哲学的解明によって、その弱点が補強されるのである。この補強策が、「歴史的生成の立場」に他ならない。ルカーチは、プロレタリアートを「社会及び歴史に対して特殊な態度をとり、本質的に社会的・歴史的発展の主体と客体との同一性としての役割をもつ立場に立つ」（『歴史』P一四七）ということとを主張するが、このような主張は現実の階級闘争の単なる解釈でしかなく、その根拠の解明とはいえないのである。

このように、われわれは、ルカーチの物象化論が、プロレタリアートの経済的地位を明らかにするものではなく、プロレタリアの生活に対する解釈（商品化といった）でしかないことを明らかにしてきたのであるが、次にルカーチの「階級意識論」及び「党組織論」の前提をなしている、「プロレタリアートの立場」に関して検討を進めなければならない。

（註）

プロレタリアートの経済的地位を明らかにするということは、資本家と労働者がとり結ぶ経済的諸関係、資本制の生産様式を分析す

首尾一貫して立脚することによって、革命戦争を担う党建設は、その前提を踏みだすことが出来る。

（二）共産主義革命の物質的諸条件の解明への道を閉ざす「プロレタリアートの立場」論

ルカーチの「プロレタリアートの立場」は彼の誤まれる資本主義批判の産物であると同時に、他方では『階級意識論』や『組織論』の基礎である。したがってわれわれは、ルカーチの「プロレタリアートの立場」を、その論理的すじみちに從って批判を加えてゆくことにしたい。

「このようにみえてくると——マルクス主義の見方にとつてすら——客観的現実なんら変らない。ちがっているのは、まさに『この現実を批判する視点』なのであって、この『価値判断』こそがまさしく新しい重要性をおびてくるのである。……社会的存在の客観的現実性はその直接性においては、プロレタリアートにとつてもブルジョアジーにとつても同じである。だが、この反面で、この直接性を両階級の意識にまで高め、単なる直接的な現実を両階級にとつて本来的な客観的現実たらしめる特殊な媒介のカテゴリはといえは同じ経済過程のなかでも、二つの階級情態のちがいにおうじて基本的に異なるらざるをえないのである。』（『歴史』P一四九）

ルカーチにとつて「プロレタリアートの立場」とは、このように、特殊な意義をもつものとされている。すなわち、客観的現実に対して、種々の価値判断が想定されるが、経済過程のなかにおける階級情態のちがいによって、プロレタリアートの立場がブルジョア社

ることによって、資本制の生産様式を基礎にした階級対立を明らかにすることを前提とし、両階級の実体的な姿を描き出すことである。ここから階級闘争に対する正しい観点を獲得することが出来る。資本家と労働者がとり結ぶ経済的諸関係、資本制の生産様式の分析は、労働力商品化論（資本・賃労働関係を商品交換関係とみる見方）に対する批判と、所有と労働との分離を資本制の取得法則として明らかにすることとして、『共産主義』14・15号の「宇野経済学批判上・中」でふれられている。

資本制の生産様式を基礎とした階級対立と両階級の実体的姿、ここから掃蕩する階級闘争に対するマルクス主義の原則は「赤報」各号、及び、序章、五号、九号、稗原論文でふれられている。

マルクスの原典に則して言えば、前者は「賃労働者は、ある時間を無報酬で資本家のために働く限りで、自分の生活のために働くこと、つまり生きることをゆるされるのだということ、全資本主義の生産制度の中心問題は労働日の延長または労働力の生産性の発展ないしその緊張の強化などによって、この無償労働を増大させることにあるということ、したがって賃労働制度は一つの奴隷制度であり、しかも労働者の受けとる支払いがより良くなるかより悪くなるかには無関係に、労働の社会的生産力の発展につれてますます過酷になる奴隷制度である」ということが、それである。（『ゴータ綱領批判』）ということに要約され、後者は「労働用具すなわち生活源泉の独占者への働く人の経済的隷従が、あらゆる形の隷属、あらゆる社会的悲惨・精神的退化・政治的隷属の根底にあること、それ故に、労働者階級の経済的解放が大目的であつて、あらゆる政治運動は、手段としてこの目的に従属すべきこと。……土地の貴族と資本の貴族は、つねにその政治的特権を、彼らの経済的独占を擁護し永續化させ、労働を隷属させるために利用しているので、政治権力の獲得はプロレタリアートの偉大な義務となっている。（『第一インター一般規約』）ということである。

正しい資本主義批判と、階級闘争に対するマルクス主義の原則に

会を止揚する立場として主張されるのである。このように問題を立てるならば、当然にも、ブルジョアの立場と、プロレタリアートの立場についての相違を明らかにすることが必要になってくる。そして、前者はたんに直接性にとどまり、後者は媒介的であることが主張される。

「ブルジョア思想は直接的所与を現実認識された現実、したがって真に客観的な現実へ転化し、こうして媒介のカテゴリを働かせて世界像を作りあげたのだが、この働きは単に『主観的なもの』にすぎず、また、『同じ状態にある』現実を『価値評価』するだけのものとなる。（『歴史』P一五〇）

「ブルジョア思想はきわめて大きい思想上の努力を重ねてはじめてこの二律背反に到達したのであるが、しかしこの二律背反の源泉である存在基盤そのものをば、自明の事実性であり、単純に受容すべき事実性とみなし、この基盤にたいして直接的態度をとること、これである。（『歴史』P一六一）

要するに、ブルジョア思想は、客観的実在を分析し、このブルジョア社会そのものに基礎をもつところの二律背反を明らかにすることが出来たにもかかわらず、しかしながら、このブルジョア社会（商品構造）そのものを自明の事実性としているがゆえに、単なる直接性にとどまり、仮象にまでわされてしまふのだとされるのである。では「プロレタリアートの立場」の優位性はどこにあるとされるのか。ルカーチはこの問題を、媒介性の彼独自の把握によって答へようとしている。

「与えられた対象の實在の直接性を超克する場であり動因である媒介形態は、対象そのものの基本的な構造原理であり、その現実的

な運動傾向であることがしめされるといふこと、したがって原理的に、思想的発生と歴史的発生とが一致するというのである。〔歴史』P一五九〕

このように、ルカーチは、媒介性の問題を対象そのものの構造とその運動に求める。すなわち、プロレタリアートは、商品構造であるとともに、その運動そのものであるがゆえに、このプロレタリアートの社会的地位が、プロレタリアートの立場に対して、媒介性の形態を与えざるをえないとされるのである。そして、このプロレタリアートの構造を運動の内在的矛盾が、主・客の分裂とされ、そこから、プロレタリアートの自己意識の形成が説かれるわけであるが、これまでのルカーチの展開の誤謬についてふれておくならば、ルカーチは、商品構造を客観的実在と考へ、この商品構造から発生する種々の物象化現象を仮象と把握しているがゆえに、ブルジョアもプロレタリアも、同じ客観的実在を前にしていながらも、その経済的情態のちがいが、両者に価値判断の相違が生じ、その結果、ブルジョア思想は、直接性にとどまってしまうといったことを主張している。だが、ブルジョアとプロレタリアの関係を経済的地位から解明する場合には、資本・賃労働関係の解明がなされねばならず、その際、資本・賃労働関係、商品交換関係（ルカーチによれば、商品構造）とみる見方は、実は仮象を見ているものでしかないこと、資本の生産過程の内的作用の分析から、資本と賃労働の経済的利害は正反対であり、なおかつ、資本の生産過程は、単に商品を生産するばかりか資本・賃労働関係をも生産すること、そして、資本が労働力と交換する賃金は、過去の不払労働でしかないこと、等々がふまえられねばならない。それゆえ、同じ客観的実在を見ても、その

「資本主義的生産においては、労働者が自己の労働力を全人格にたいして客観化し、これを自己に属する商品として販売せざるをえないために、生産過程の単なる客体への労働者の転化は、たしかに客観的には完成される。だがまさにこのとき、商品としての自己を客体化する人間のなかで客体性と主体性とが分裂が生ずるから、この転化の状態は同時に意識されるものとなるのである。〔歴史』P一八二）

「このようにみてくると、労働者の社会的存在とかれの意識諸形態とを弁証法的なものたらしめ、こうしてこれらの単なる直接性を超克せしめる契機が、よりはっきりと具体的にわかるのである。とりわけ労働者は自己を商品として意識するときはじめ、自己の社会的存在を意識できる。すでにのべたように、労働者は自己が直接的存在である限り生産過程内部での純粹な単なる客体という地位にある。だが、この直接性が多様な媒介の結果であることが明らかにとなり、この直接性の前提となることがすべてはつきりしはじめるとともに、商品構造の物神的形態がくずれはじめる。すなわち、労働者は商品のなかで自己自身を認識し資本と労働者自身の関係を認識するのである。〔歴史』P一八三）

このようにルカーチは、プロレタリアートの意識の発生を、プロレタリアの主体性と客体性との分裂に求めるのである。このことに關して、ルカーチは、別のところで「このような人格の二重化は、一方で人間が商品運動の要素に分解するとともに、他方でこの運動の（客観的な無力な）傍観者になるといふことである。〔歴史』P一七九）という風にのべている。

ルカーチによれば、プロレタリアートの立場は媒介形態であり、

立場によって認識内容が異なるというルカーチの主張はあやまりであり、ルカーチが、客観的実在と考へている商品構造そのものがブルジョアとプロレタリアの関係においては仮象であることなのである。

だから、正しくは、商品交換という一見自由平等であり、かつ、客観的実在の如くみえる関係のなかで、ブルジョアの経済的利益とプロレタリアの経済的利益が正反対に敵対しているにすぎないのであって、それは、ブルジョアの立場とか、プロレタリアの立場といった「価値判断」の問題ではないのである。要するに、二つの事実があるのである。だから、ルカーチの如くブルジョア思想に対するプロレタリアートの立場の優位性を論ずることは全くこっけいである。なぜなら、現実には、一つの生産様式のなかでブルジョアの利益とプロレタリアの利益とが対立しており、その思想的表現としてブルジョア思想とプロレタリアートの思想が生れているのであるにもかかわらず、ルカーチの場合は、一つの客観的実在をめぐる二つの立場の闘争として逆転して把握されてしまうからである。

ルカーチは、このように、誤まった資本主義批判から、ブルジョア思想とプロレタリアートの立場との差異の解明に、階級闘争の一切をかけてしまうことになったのであるが、次に、ルカーチのプロレタリアートの立場そのものが批判されねばならない。「プロレタリアートの歴史認識は、かれらが現在を認識し、自己の社会状態を自己認識し、さらには（発生という意味での）これらの必然性をおさらかにするとともに、始まるのである」という具合にルカーチは論を進めるのであるが、まずプロレタリアートの自己認識がどのように生まれるのかが次のように展開される。

その内実は、商品構造と、運動であった。かくして、プロレタリアートは、自己を対象化、商品化されたものとして強制され、商品構造とその運動を強制されるなかで、それと同時にそれらの運動を客観的に傍観することによって、自己を商品として認識し、自己の社会的存在を認識できるとされるのである。そして、プロレタリアが、自己の社会的存在を商品構造として認識したときに、それが資本家と労働者自身の関係の認識とされ、商品構造がもたらす物神性の崩壊とされるのである。

ところで、すでにふれてきたように、ルカーチの言うプロレタリアートの社会的存在の認識、資本家と労働者との関係なるものは、商品構造として把握されてしまっているが故に、それは、実は、仮象を本質と見誤ったものであることであつた。だから、ここで物神性の形態がくずれるといふのは誤りであつて、実は、ルカーチの頭の中での物神性がくずれたにすぎず、ルカーチの理論そのものは、資本主義の物神性に金しぼりにされているのである。このことをふまえるならば、次に問題にされるのは、ルカーチの、このようなプロレタリアートの意識の発生をプロレタリアの認識原理そのものが検討されねばならない。そのためには、もう少しルカーチの展開を追ってみなければならぬ。ルカーチはプロレタリアートの自己認識を論じた後に、次のようにつづけている。「労働者は商品のなかで自己自身を認識し、資本と労働者自身の関係を認識するのであるしたがって、労働者がこの客体としての役割を超克することがなお実践的に不可能であるかぎりかれの意識は商品の自己意識である。〔歴史』P一七九）

ここでルカーチの言わんとしていることはプロレタリアートの立

場は実践的であるにもかかわらず、自己の客体化を克服しえない場合には、プロレタリアートの意識は、商品の自己意識にとどまるとされているのであり、この自己意識から、プロレタリアートの革命的階級意識までの発展がどのようにして勝ちとられるか、ということとを明らかにしようとしているのである。

「ところが、労働者が自己を商品として認識することは、認識としてすでに実践的である。すなわち、この自己意識というそのことが、その認識客観の対象的・構造的な変化をはたすものなのである。このことをより具体的にいえば、こうである。商品としての労働の客観的な特質とは、その使用価値（つまり剰余生産物を生産する能力）がすべての使用価値とおなじように、資本主義の量的な交換のカテゴリーのなかに跡形もなく消え去ることにあるのだが、このことが商品としての労働の意識のなかで、またこの意識をとおして社会的現実へと高まるのである。いかえれば、その商品としての労働の特質は、この意識なしには認識されない経済的発展の衝動力であるけれども、この意識をとおせば自己を客観化するのである。ところでこうしたたぐいの労働力商品は、物的外皮のもとで一つの人間関係であり、量化をもたらず外皮のもとで一つの生きた核であるという特殊な対象性をおびていることがわかれば、労働力商品に基づく各商品の物神的性格も明らかになる。すなわちあらゆる商品のそれぞれのなかに、その中核である人間関係が社会発展の要因となつてあらわれているのである。」（歴史「P一八五」）

ルカーチは、労働者が自己を商品として認識することは、認識としてすでに実践的であると語っている。すなわち、この自己認識は、認識客観の対象的・構造的な変化をもたらず、とされるのである。

が商品化することが、なぜプロレタリアートの場合のみ革命的階級意識にまで高まるかということも、あきらかになるだろう。すでにわれわれが第一章でのべたように、たしかに物象化の基本構造は、近代資本主義のあらゆる社会諸形態にあきらかとなる。だが物象化の構造が、完全にはつきりと意識されるのは、プロレタリアの労働関係のなかにおいてだけである。ことにプロレタリアの労働は、その直接的にあたえられた姿においてすでに、生の抽象的な商品形態をおびているのになし、それ以外の労働形態では抽象化構造は『精神労働』だとか『責任』などといった前景のうしろに（しばしば家長制度の形態のうしろに）かくれている。しかも、抽象化が自分の活動を商品として販売する人間の『魂』のなかに深く入りこめばそれだけ、この外見が人を欺くものとなるのである。商品形態がこのように客観的にかくれていることに主観的に照応していることは、労働者の物象化過程または商品化は労働者の意識的な反抗をうけないかぎり、たしかにこれを否定しかれの『心』を傷つけ歪めるものであるが、それはかれの肉体的本質までも商品に転化しはしない。（歴史「P一八九」）

プロレタリアートの立場を、プロレタリアの主・客の分裂にもとめたルカーチは、商品の自己意識から、物神性の崩壊にいたるプロレタリアの意識の発展の契機を、この主・客の分裂のうちの主体性が、人間性を喪失していないことに求めてしまっているのである。すなわち、労働者の活動が、商品化し、その結果、商品構造の中にとじ込められ、対象性の形態を強制されるけれども、労働者の人間性は喪失せず、この労働者の人間性が、自己の社会的存在を意識する契機とされているのである。

このことは何を意味しているだろうか。

ルカーチは、このことの説明として、労働力の商品化が、その使用価値を、交換においては捨象してしまうがゆえに、この商品としての労働に対する意識は、一つの社会的現実へと高まるとされている。さらに、この労働力商品が、物的外皮のもとでの一つの人間関係であることが理解されれば、労働力商品にもづく各商品の物神的性格も明らかになる、とされている。

このことは、要するに、商品としての自己意識が、商品構造を理解し、その本質としての人間関係を認識することによって、自己自身を段階へと形成するということである。だから、労働者の商品としての自己認識が、認識客観の対象的・構造的な変化をもたらず、とされていることは、簡単に言えば、労働者が個々バラバラの存在から、段階としての一つの同質な集団へと形成されていくということに他ならないのである。

いかえれば、ルカーチは、商品構造のなかに、労働力商品を位置づけ、この労働力商品としての労働者が自己のおかれた客観的存在を意識することによって、この労働力商品としての労働者に共通な一つの内実を把握することにより、一つの同質性を勝ちとり、階級として自己を成立させてゆくということを論じているのであるが、このことは、商品構造としての資本主義社会の、社会構造からの演繹にすぎなかった。ここにおいてルカーチは、商品構造の本質を階級関係として誤って把握しているのであるが、この誤りに導かれて、ルカーチは、この商品の自己意識から、物神性の崩壊にいたる意識の発展の契機に関して次のようにのべる。

「このようにみてくると、人間の全人格から切りはなされた活動

ところで、労働者の人間性によって、商品の自己意識から出発して、商品の物神性を見破り、このことによって階級として成立したプロレタリアートは、次に何を契機にして、階級意識に到達しうるのか、ということが問題になってくる。

「他方では、共通の状態および共通の利害の認識によって目覚めそして成長する階級意識は、抽象的にみれば、プロレタリアートに特有のものではない。ではプロレタリアートの状態の独自性はないに基づいているのかといえば、心理学的に意識されていようと、最初は無意識のままであろうと、直接性の超克が社会の総体性を志向しているということである。」（歴史「P一九五」）

「こうした生成の立場においてこそ、はじめてプロレタリアートの意識は歴史的に発展する社会の自己意識に高まるのである。もとより単なる商品関係の意識としてみると、プロレタリアートはただ経済過程の客体としてのみ意識される。というのは、商品は生産されるものであり、そうして、また労働者も商品ないし直接生産者としては、せいぜいこの機構内部の一つの機械的動輪にすぎないものだからである。だが、資本の抽象性とその生産と再生産の不断の過程のなかで解消されてしまうと、この立場においてこそ、プロレタリアートが——たとえば束縛され、しかも最初は無意識であろうとも——この過程の真の主体であることが、意識できるのである。」（歴史「P二〇七」）

ルカーチは、共通の状態及び共通の利害の認識によって成長する階級意識は、プロレタリアートに特有のものではないと語っている。そして、プロレタリアートの独自性は、直接性の超克が社会の総体性を志向しているということに求められる。すなわち、プロレタリ

アの存在そのものがもつところの、プロレタリアの立場——歴史的生成の立場においてプロレタリアートの意識は、歴史的に発展する社会の自己意識に高まる、とされるのである。そして、次にこの社会の自己意識にまで高まったプロレタリアートの意識と実践との関係が論じられている。

「このように、資本主義のなかに生活するかぎり、すべての人間にとってかならず直接的現実とは抽象化されるとすれば、この物象化を克服しうるためには、具体的に生ずる発展全体の矛盾に具体的にかかわり、この発展全体にたいする矛盾の内在的意味を意識することに、物象化された存在構造を实践的に打破しようとする傾向がたえず、いよいよ新たに再生産されねばならない。……物象化された存在構造の打破は、過程そのものの内在的矛盾を意識してはじめてできるものだとすることであろう。プロレタリアートの意識は発展の弁証法によって客観的に動かされる歩みを示すが、かれ自身の活動ですすめないばかりにはじめてプロレタリアートの意識は過程そのものの意識にまで高まり、プロレタリアートは歴史の主体・客体の同一性としてあらわれ、かれの実践は現実の変革となるのである。」〔歴史〕P二四三〕

ルカーチは、直接的現実を物象化された存在構造ととらえ、そして、この物象化された存在構造を打破しようとする傾向が生れなければならぬと考へ、そして、この物象化された存在構造の打破は過程そのものの内部的矛盾を意識してはじめて可能であると考えている。

そして、プロレタリアートの意識は発展の弁証法によって客観的に動かされているが、この客観的な運動がゆきつまと、プロレタ

リアのなかに宿る。そしてプロレタリアートは、このブルジョア社会の運動そのものであるが故に、この物象化された存在構造を实践的に打破する傾向が、意識されはじめ、商品の自己意識がプロレタリアートの階級意識へと成長しはじめるとされる。その理由は、プロレタリアートが、社会的発展過程の主体と客体の同一性だからとされるのである。

結局ルカーチは、ここで、プロレタリアがどのようにして階級意識をもつに到るかを説明しようとし、それをプロレタリアートの存在を商品構造としてとらえたことによつて、存在そのものの中に、プロレタリアートの革命性を見ることが出来ず、社会の発展、すなわち、歴史のなかに、その理由を求めていったのである。

プロレタリアートが、階級意識をもつようになるのは、彼らの経済的地位から説明されるべきであるにもかかわらず、このプロレタリアの経済的地位を明らかにしなかつたルカーチは、共産主義革命の特質的諸条件を明らかにし、その歴史的教訓をくみとるべき歴史の分野に、この階級意識の形成の問題をもちこむことによつて、空虚な論理をつみかさねざるをえなかつたのである。

(三) 階級闘争の歴史的教訓を導きえない「階級意識」論

われわれはすでに、ルカーチの物象化論と「プロレタリアートの立場」に対する、検討と批判を進めてきた。そしてその内実が、一切を「商品構造」という観点から理解しようとした結果、誤った資本主義批判に陥り、誤謬に貫かれたものであることを指摘してきた。この誤謬はルカーチが「階級意識」を論じる際にその頂点に到達している。

リアートの意識が逆に客体に働きかけ、プロレタリアートは、主客の同一性としてあらわれ、かれの実践は現実の変革となるとされているのである。このことは、さらに次のように述べられている。

「社会現象の過程的性格をどれほど正しく洞察し、現象の硬直した物象性の仮象をどれほど正しくあきらかにしても、資本主義社会におけるこの仮象を実践的に止揚できないことは明らかだからである。このような洞察を実践に転化しうる契機は、まさしく社会的発展過程によって規定されている。このようにしてプロレタリアートの思惟はさしあたり単に実践の理論であるが、そののち漸進的にはじめて現実を変革する実践的理論に転化するのである。ここでそのあらしをでも描くことはできないのだけれども、この転化過程の個々の段階をみれば、プロレタリアートの階級意識の弁証法的発展の道筋をきわめてあきらかにできるのである。このようにしてこそプロレタリアートの客観的な社会的歴史的状态とその階級意識とのあいだの緊密な弁証法的相互作用も、あきらかとなるし、プロレタリアートが社会発展過程の主体と客体との同一性であるとの確証が、現実的に具体化するのである。」〔歴史〕P二五八〕

かくして、プロレタリアの立場の論理的すじみちは完結した。ルカーチは、まず、資本主義社会における資本制の生産様式を分析するなかから、資本の運動と階級の再生産をみることなく、それを物象化された商品構造ととらえた。そして、この物象化された社会において、プロレタリアは商品であるとともに、この社会の運動そのものであるとされる。そして、この商品としてのプロレタリアには、依然として人間の本質が失なわれていないが故に、自己の客体化された商品の運動を認識し、かくて商品の自己意識が、プロレタ

「社会的構成体がとる人間には無縁な物象性を、人間と人間の関係へとこのように還元することによつて、同時に、あの非合理的な個性的な原理にわりあてられた誤った意義づけが、したがって、ディレンマの他の側面がすてられる。なぜなら、社会的構成体とその歴史的運動がもつ、人間とは無縁な物象性をこのように止揚すると、その物象性はその根拠である人間と人間の関係に、還元されるが、そうすることによつては、人間の意志とくに個人の意志と思惟から独立した、社会構成体とその運動の合法性と客観性とはけつてなくなりほしなからである。」〔歴史〕P二七六〕

ルカーチの「階級意識」はすでに検討してきた「物象化とプロレタリアートの意識」よりも先立つて書かれたものであるが、基本的な点での変更はみあたらない。後に物象化論として展開されてゆく内容が、それゆえ、ここでは非常に簡単に提出されている。すなわち、ルカーチは、商品構造が生みだす物象化と、その表現たる非合理的な法則が打破されたとしても、そして、社会構成体を、人間と人間との関係として把握したとしても、そのことによつて個人の意志と思惟から独立した社会構成体と運動の法則性はなくなりほしなと語っている。このように考えると、当然にも、次にはこの物象化された法則ではないところの法則性を、どのようにすれば認識しうるのかということが問題になってくる。ルカーチによれば、階級意識とは「生産過程のなかの一定の類型的状态に帰せられ、それに合理的に適合する反応」であり、それゆえ商品の物神性を止揚した後になおかつ残る、社会構成体の運動法則を解明することが、とりもなおさず、階級意識の解明となるのである。われわれは、すでに解明してきたようにルカーチのこの問題のたて方そのものの中

に誤謬を指摘しうるのであるが、ここでは、とりあえずルカーチが、どのようにして問題に対応しているかを検討するなかで、その誤謬を明らかにしてゆこう。

「具体的な研究とは、全体としての社会にかかわらせるといふことである。なぜなら、全体としての社会にかかわらせればはじめて、人間が自分の存在についてもつとどきどきの意識が、その意識のあらゆる本質的な規定をうけとるからである」(『歴史』P二七九)

「この意識を、具体的な総体性にかかわらせ、その関係から弁証法的に規定すれば、上のような単なる記述をのりこえて客観的可能性のカテゴリーが生れてくるのである。意識というものは社会の全体にかかわらせられてくると、人間はこの状態つまり生活状態からでてくる利害を、直接的な行動にかかわらせて完全に理解できる、とともに——またこの利害に必ず——全社会の構造にかかわらせて完全に理解できれば、人間が一定の生活状態にあってもつてである思想や感情などが認識できよう」(『歴史』P二八〇)

これが、階級意識解明のためのルカーチの方法である。すなわち、個々人が陥る物象化された「虚偽の意識」、これは、その発生の根拠が存在している以上、なにかの真実のあらわれではあるが、しかし、この意識の内容そのものは、その根拠を説明しえないが故に虚偽の意識ではないが、しかしながら、それによって、その意識が知りえない社会的発展の客観的な目的をうながすもの、そういうものとしての「虚偽の意識」は、全体としての社会、具体的な総体性にかかわらせてはじめて理解しうるとされているのである。

ルカーチは、このような観点から、「前資本主義社会と資本主義社会における階級意識」「ブルジョアジーと小ブルジョアジーの階

級意識」「俗流マルクス主義者の階級意識」をそれぞれ検討した後、「プロレタリアートの階級意識」を論じている。それゆえ、われわれは、ルカーチの「プロレタリアートの階級意識」論を検討するなかで、その内容上のみならず、方法上の誤りを明らかにしてゆこう。

「プロレタリアートは社会を意識的に変革するという課題を歴史によってあたえられているから、かれらの階級意識のなかに直接の利害と究極目的との弁証法的矛盾、いいかえれば、個々の契機と全体の弁証法的矛盾があらわれてくるはずである。というのは、発展過程の個々の契機、つまりその具体的な要求ともなっている具体的状態は、その本性からして現在の資本主義社会に内在しており、資本主義社会の法則の支配をうけており、この社会の経済的構造に従属している。こうした発展過程の個々の契機が、過程の全体的観察に結びつくことによつて、すなわち個々の契機が究極の目的にかわりをもつことによつて初めて、プロレタリアートが具体的・意識的に資本主義社会を超越するのであり、革命的となるからである。このことは主観的には、つまりプロレタリアートの階級意識にたいしてはつぎのことを意味している。すなわち、直接の利害と社会全体への客観的な作用との弁証法的関係がプロレタリアート自身に意識されるのであって、従来のあらゆる階級とはちがって、その弁証法的関係が意識の向うがわで純客観的な過程としてあらわれるのではない、という意味をもっている」(『歴史』P三三〇)

ここでは主要に、三つの内容が語られている。第一は、プロレタリアートは社会の意識的変革という課題を歴史によって与えられている、という大前提であり、第二は、プロレタリアートが革命的に生産様式を把握することなく、スターリンのごとく、私的所有を資本制的生産様式の前提にしてみたり、ルカーチの如く、資本家と労働者の関係をも商品構造におし込んでしまふことによつては、階級の経済的基礎に対する正しい理解はなしえないのである。

私的所有を、資本制的生産様式の前提とすれば、資本主義の本質は、搾取として把握されるが、この搾取からは、プロレタリアートの革命性を論理的に論証しえないが故に、歴史の必然性から説明し、生産力と生産関係の矛盾に救いを求めているのがスターリンであり、ルカーチの場合は、商品構造の物神性からは、プロレタリアートの革命性を論理的に説明出来ないから、歴史を主体化したり、歴史的生産の立場といった観念の産物に助けを求めているのである。

われわれにとつては歴史の解明とは階級闘争の歴史としてプロレタリア革命を実現するための実践のための理論的武器を与えるものとして、具体的に解明されるべきものであつて、決して、プロレタリアートは何故革命的か、どのように革命的になりうるか、といった問題は、歴史から説明してはならないのであり、このような問題は、資本主義批判から導かれるものなのである。ルカーチの資本主

なる根拠であり、第三は、プロレタリア革命とそれ以前の革命との相違である。

第一の内容は、スターリンが定式化した、「社会発展の法則」と大差ない。スターリンが、資本主義から社会主義への移行の必然性は、この見地を、内的に、プロレタリアートの意識の発展を促進する弁証法的矛盾として説明しようとしているのである。プロレタリアートの任務の内容を何故歴史に求めてしまふのかといえ、それは、正しい資本主義批判を提起出来ない結果、資本主義社会の内でのプロレタリアートを説明出来ず、その結果歴史(スターリンによれば、生産力と生産関係の矛盾とか、旧いものと新しいもの闘争、ルカーチによれば、歴史的生成の立場)にその説明を求めてしまふのである。

われわれがすでに明らかにしてきたように所有と労働との分離を、資本の生産過程の内的作用の分析から論証することを手がかりとして資本家と労働者との経済的利害が正反対に對立し、この経済的條件を基礎にして、階級関係が成立するのみならず、さらに資本制の生産様式が、この階級関係そのものを生産することとして、資本制

自己組織への序

菅谷規矩雄表現集1964—1972

わが肉体は〈私〉のバリエード

〈こゝろ〉(こゝろ)までも生きたる(と)

言いきりたいのだ。

B5判一四〇頁 価六〇〇円

第一部 六四年夏—六九年夏

* わが仮空のアカデミー * 学校の思想 * 情況論

* 表現の思想 * 〈評議会見解〉批判 他

第二部 六九年秋—七一年夏

* 授業再開拒否 * 〈解放学校〉序説 * 拒否する思想

の永続的現在 * 自己組織への序 * 〈無言—黙否〉他

第三部 七一年秋—七二年夏

* 違法性の領域へ * 〈処分〉に関する文書 I—III

編集 菅谷規矩雄表現集編集委員会

発売

吉祥寺ウニタ書店
東京都武蔵野市吉祥寺
本町2-20-7
TEL 0422-22-9618

義批判からは、ブルジョアジーにもプロレタリアートにも真理であるような客観的実在としてしか資本主義を把握しえない（これは商品構造という枠から資本・賃労働関係をみるからだ）が故に、価値判断とか、立場といった問題が重要視され、その結果、歴史によってこれらを説明しようとするのである。このような方法が何故誤りかと言えば、資本主義社会も、歴史であるにもかかわらず、資本主義社会の解明から歴史を説明出来ず、歴史から資本主義社会を説明するという逆転した発想は、主観的にはともあれ客観的には資本主義を超越歴史化するブルジョアイデオロギーと同地平に陥っているからである。

ルカーチの第二の内容は、それゆえ、ジレンマに陥っている。プロレタリアートの革命的根源を歴史に求めてしまったルカーチは「個々の契機と全体の弁証法的矛盾」といったことをバネとしてプロレタリアートの革命性を論証しようとするが、資本主義の発展過程の個々の契機が、過程の全体的観察と結びつくといったことは、つきつめれば、資本主義が全般的危機に陥るといったことを想定せざるをえないからである。このことは後で検討するとして、さらに、このような方法からは、歴史を「論理」に解消してしまう結果歴史のなから、生き生きとしたものが全てぬきとられ、抽象的な歴史、運命論的歴史が残るのみであり、このような抽象的な歴史から、プロレタリアートの革命性を語ったにしても、現実の実践の武器にはならないのであり、現実の日常活動を美化するか、もしくは発想的革命家をつくり出すのである。

第三の問題は、プロレタリア革命の特質を「直接の利害と社会全体への客観的作用との弁証法的関係がプロレタリアート自身に意識

〔歴史〕P三三二六

プロレタリアートの革命性を、社会の経済構造の発展過程の個々の契機と過程の全体性の観察との結合としたルカーチは、この問題を、結局は、資本主義の経済的危機が、社会を変革するというプロレタリアートの意識を形成してゆく最も根本的な要因としてしまうことになるのである。このように問題をたてると、階級闘争の歴史的教訓は、内容のない、空虚な、階級意識の発展いかんといった問題に還元されてしまうのである。

すなわち、革命党の実践にとっては、階級闘争の歴史的教訓を解明することが必須の条件であるにもかかわらず、歴史を抽象化し神秘化してしまったルカーチは、この階級闘争の歴史的教訓を明らかにする手だてを完全に失っているのである。だから、次のようなことを確認することに終ってしまっている。

「資本主義の危機からの逃げ道を示すことができるのは、ただプロレタリアートの意識だけである。プロレタリアートの意識が存在しないかぎり、危機は永久につづき、そのふりだしにもどるのである。」

される」と把握する結果、結局、プロレタリアートの階級意識、プロレタリアートの歴史的生成の立場からの全体性の認識といったことが、階級闘争の根本問題にされ、党組織の問題もこのような内容を基礎にしていることである。すなわち、ルカーチは、歴史を「論理」に解消し、抽象的な歴史をつくりあげてしまった結果、本来ならば、具体的、歴史的に解明されるべき階級闘争をば、階級意識といった抽象的な内容でしか語ることが出来ないものである。だからルカーチは、階級意識という概念によって、階級闘争を語ろうとしているのである。

われわれは、ルカーチが、階級闘争論をさらに展開するのを追うことによって、その抽象性、非実践性を明らかにしてゆかねばならない。

「このばあい（日常生活の実際行為のなか）にのみ、組織上などでブルジョアジーのもつ優越さがはつきりあらわれてくるのだが、プロレタリアートにとって、かれらみずからがもっている独自の組織、つまり階級として独自に組織しうる可能性が実践のうえで効力をもたなくなる。ところで資本主義の経済的危機がすすむほどますます、経済過程のこの統一がはつきりあらわれてきて、実践上でもとらえるのである。たしかに、こうした統一は、いわゆる正常な時代にも存在しており、したがってプロレタリアートの階級の立場からみとめられはした。だが現象形態と究極の基礎とのへだたりがあまりにも大きいために、プロレタリアートはかれらの行為のなかで、この統一を実践上の帰結まで導くことができなかつたのである。ところが、このような事情は決定的な危機の時代には変化する。そうすると総過程の統一が捉えられるようになってくる。」

り、同じ状態をくりかえす。そしてついに、歴史の实地教育はかぎりなき苦しみをなめ、おそろしいまわり道をしたのちにやっと、プロレタリアートの意識過程を完成させ、そうすることによってプロレタリアートの手に歴史の指導権をあたえるのである。〔歴史〕P三三三九

このようなことが何度確認されてもそれは革命実践の基準を導き出すことは出来ない。資本・賃労働関係が、階級関係の経済的基礎であることがみぬけないルカーチは、商品としてのプロレタリアがどのような階級に成長するかと問い、そしてさらにこの社会を変革するためにはどのような過程が必要かということ考察し、階級意識という彼独自の概念をつくりあげたのであった。だが、この階級意識たるや、実は、階級闘争の表現にすぎず、階級関係の内容を歴史の論理である歴史的生成の立場に求めたルカーチは、その代償として、抽象的な歴史しか語ることが出来なくなってしまうのである。このルカーチの歴史観における観念性は、当然にも組織論における観念性へとひきつがれているのである。

ドキュメント
弾圧

1928→1972
穂坂久仁雄著

B 6判 259頁
定価 630円(〒110)

「戦前」が重苦しく語られる現在、本書は、進行する権力の弾圧を現場からのルポを軸に鋭く暴く。また、あの厳冬の一九三〇―四〇年代の序章となった三・一五日共大弾圧にさらされた二人の青年の軌跡を追う他、弾圧の極にある刑務所で行なわれている恐るべき人間破壊の実態を網走からのルポによって告発する。

民主主義は過激派を避けて通った／早暁の訪問者／治安維持法と第一回普通選挙昭和の甘粕たちの拷問／赤軍罪・赤軍狩破防法の登場／弾圧の思想・弾圧の論理鴉鳴くさいはて／鏡橋を渡った人々／まかり通る獄内暴力／衛生兵と（大和世）への抵抗／獄窓の若きテロリスト

同時代社

新宿区西新宿4-39-25
振替 (東京) 174326

●好評発売中！！
●小社の出版物がお近くの書店にない場合は直接御注文下さい

『歴史と階級意識』の批判 下

榎原均

(四) 自然発生的な組織の美化に つながる「組織論」

ルカーチが、組織問題を論じる場合、常に念頭におかれているのは、ローザ・ルクセンブルグである。ルカーチは、第二インターから第三インターへの、社会民主党から共産党への転換を総括するポイントを組織問題におき、この観点からローザ・ルクセンブルグへの内在的批判を試み、レーニン主義を獲得しようとしているのであるが、しかしこの作業は成功していない。われわれは、ここでルカーチの「組織論」をとりあげるなかで、この作業が何故失敗に終わったかを明らかにしてゆこう。

ルカーチは、ローザの党に対する考え方、「大衆ストライキのための技術的準備および指導を行うことであってはならず、なによりもまず、運動の全体を政治的に指導すること」を引用しつつ、ローザの第二インター諸派に対する優位性を確認しつつ、その限界を次のように批判している。

「このようにして、組織問題の明確な認識という点において、重

大な進歩が行われるにいたった。つまり組織問題は、それまでの抽象的な孤立状態をぬけだした（要するに、組織の過大評価をやめたわけである）ことによって、革命の過程における正しい機能を、組織にたいして割当ての方策が、とられることになったのである。しかしそのためには、ローザ・ルクセンブルグとしては、政治的指導の問題を、組織という見地から改めて問題にしないことが、必要であった筈である。いいかえると、プロレタリアートの政党に対して、政治的指導者たる資格を与える、例の組織上の諸契機を取出して見せてやる必要がある筈である。」（『組織論』P一四、未来社版）

ルカーチは、ローザに対して、革命の過程における正しい機能を組織に対してわりあてている点で評価しつつ、しかしながら、ローザの欠陥を、党が、政治的指導者たりえるための組織上の諸契機を示しえなかつたこととしているのである。ではこのような総括に基づいて、ルカーチは党そのものをどのように考えているのだろうか。「理論と実践とを媒介する形態は組織そのものだからである。そしてあらゆる弁証法的関係においてそうであるが、この場合もまた、弁証法的関係を形成している、理論と実践という構成要素は、組織

らわれとして資本蓄積の制限をもたらす軍国主義の自己矛盾として把握され帝国主義の下での民族戦争の実現不可能という思想に傾斜するが、逆に、植民地従属国の革命党の立場に立てば、民族解放戦争が、非資本制領域を縮小させ、資本蓄積を制限するという理解を生み出し、一切を民族解放戦争にかけてしまうことになるのである。(具体的にはパプロ派)

このような転倒が行なわれたことを知ればローザは驚いたにちがいないが、このようなジグザグが起きるのは、その経済決定論にある。すなわち、どのようにして帝国主義が成立したのか、という具合に問題をたてることなく、何故帝国主義が成立したか、その必然性を問うために、具体的現実から切断された論理の世界に昇天し、現実を経済的基礎から説明するのではなく、経済の論理から現実を割り切ろうとしたことである。

さらに「軍国主義」に関して若干ふれておくならば、ローザの「軍国主義」論は、「資本蓄積の一領域」として考察され、そして「軍国主義」を、資本蓄積の崩壊をもたらすものとして論理的に説明しているが、資本家階級の階級支配として把握されていないことである。だから一方で、帝国主義の崩壊の必然性を「論理」として確認することによって、資本家階級の打倒と、プロレタリア独裁の樹立という具体的な政治課題が、単なるお題目になってしまっている。のである。すなわち、敵階級の具体的な分析はおざりにされ、国家権力に対する直接的闘争の延長に革命を夢みる合法主義の路線が、このような論理からは導かれざるをえないのである。

ルカーチが依拠しているローザに関して若干検討してきたが、次に、ルカーチ自身の内容に移らねばならない。ルカーチは、ローザ

とレーニンを対比しつつ、ローザの弱点を具体的分析の欠如にとらえ、「マルクス主義者にとつては、具体的状態の具体的分析は、純理論に対立するものではなく、その逆であつて、正しい理論の極点、理論が真に実現されるところの、理論が——それゆえ——実践に転化するところの点である。」(『レーニン論』P五三)と書いている。このような内容は、一見正しいようにみえるが、すでに明らかにしてきたように、まさに、純理論の内容そのものが問題であつて、われわれは、この理論の可否を、資本主義批判の内容として、一つの基準を形成してきたのであつた。すなわち、ルカーチは、「具体的状態の具体的分析」とか「政治方針への具体化」とかいったことをくり返しているが、ルカーチが依拠している理論からは、このようなルカーチの意図は実現されないことが、はっきりと確認されねばならないのである。

このルカーチの弱点は彼の修正主義批判にも明確にあらわれている。ルカーチは修正主義を次の五点において批判する。(1)プロレタリアートの階級の立場の否定、(2)弁証法の否定、(3)社会の変化を認めない、(4)資本主義社会を永遠化している、(5)日常利害を主張する。以上がルカーチの批判点であるが、これらは哲学的批判にとどまり、理論的、政治的批判にはなっていない。その理由は、ルカーチ自身が、「プロレタリアートの立場」とか「革命の現実性」といった立場を修正主義が保持していないことに修正主義の本質をみており、これらの立場が復活されるならば、修正主義が克服しうるのではないかと考えているからである。

以上、ルカーチの経済理論(とりわけ彼が依拠しているローザ理論)の政治的意味は、合法主義と党派闘争の軽視として、レーニン

主義の最も核心的内容を忘れ去るものでしかないのである。

最後に、ルカーチの政治理論、これは主要には、プロレタリアートの闘争と党の理論、いかえれば、戦術論・運動論といった領域であるが、この内容が検討されねばならない。かつて関西ブンドがその立脚点を「政治過程論」としてまとめあげた際に依拠したのはルカーチのこの部分であり、また、藤本進治が「革命の哲学」へと体系化した思想の出发点も、ここに求めることが出来る。だから、われわれは、この部分の総括は、われわれの実践との関連でなさねばならないが、ここではその基本的骨格を与えることにとどめたい。

ルカーチの党組織論そのものの批判は、すでになされている。ここでは、ルカーチの党が、何を基準に成立しているかに焦点を合わせなければならぬ。というのも、ルカーチは主観的には、党の基準を階級意識に求めているが、この「階級意識」といった規定はあまりであり、ルカーチが、この言葉によって言い表わそうとした内容そのものがつかみとられねばならないからである。たとえば、ルカーチは「共産主義者」目に見える形をとったプロレタリアートの階級意識である。そして彼らの組織問題は、プロレタリアートがどのようにしてこの彼ら自身の階級意識を現実、完全におのれのものとするかの見通しによって、決定される(『レーニン論』P三二)と主張しているが、この問題提起は、結局、階級闘争と党の相互関係を論じることによってしか展開しえないのである。

「プロレタリアートが闘争で勝利を得たいと思うならば、ブルジョア社会を崩壊させるのに役立つあらゆる潮流を促進し支持しなければならぬし、またなんらかのかたちで抑圧されている階層の自然発生的で、またひじょうにあいまいなものであつても、そのすべ

ての運動を革命運動全体のなかに組み入れるように努力しなければならぬ。そして革命の時期の切迫は、旧社会に不満なものすべてがプロレタリアートへの合同をもとめるか、あるいはすくなくともプロレタリアートとの連繫をもとめるか、このうちのうちにあらわれる。だがここにまさに大きな危険がひそみうるのである。なぜなら、階級的に正しい政治方針が保証されているような方法で、プロレタリアートの党が組織されていなければ、党は革命情勢にあつて、たえず増加している同盟軍を援助することができずに、混乱させるからである。」(『レーニン論』P三六)

ルカーチは、このように、革命情勢の特質を把握し、そこから、

プロレタリアートの党の基準を明らかにしようとしている。だがルカーチの革命情勢の把握の決定的な弱点は、そこにブルジョア階級及び国家権力が実体的に登場していないことである。「ブルジョア社会」の崩壊が述べられているにもかかわらず、ブルジョア階級も国家権力を、ブルジョア社会そのものとして把握してしまふ、資本主義の物性に金しぼりにされたルカーチの見解を見ることが出来る。まさに、この誤謬は誤まれる資本主義批判の産物に他ならない。

次に、このように敵階級を実体的に登場させないまま、階級闘争を論じる結果、党が「正しい方針」一般に解消されてしまふ、党派闘争及び、プロレタリア独裁の具体的内容に関して説明することが出来ないことである。すなわち、ルカーチは、革命情勢を論じることによって、この「究極目標」から党の基準を論じようとしたのだが、資本主義批判の誤りに与えられた、ブルジョア階級のブルジョア社会一般への解消によって、プロレタリア革命の「究極目標」を明らかにすることに失敗したのであつた。だから、ルカーチは、

「組織問題とイデオロギー」という項では、いわゆる外部注入論について、「組織問題と自由」では、革命党の規約について、「組織と党内規律」では党の規律について各々語っている。だから、われわれも、このルカーチの提起にそって、ルカーチがレーニン主義をどのように解釈しているかを検討してゆこう。

「組織問題とイデオロギー」という項ではルカーチは、ローザが「革命の純粋にプロレタリア的な性格を暗黙の前提にしている」として批判しつつ、プロレタリアートの階級意識と客観的危機の関連を次のように分析し、そしてここに、レーニン型党の存在理由を求めている。

「むしろ問題なのは、プロレタリアートの階級意識が、客観的な経済危機と平行して発展するものではないということであり、そしてそれが、直接的に、かつプロレタリアート全体を通じて同じように、発展するものではないということである。またプロレタリアートの大部分が、精神的には依然として、ブルジョアジーの影響下にあるということ、そしてどんなに激しい経済的危機の展開さへも、そのプロレタリアートを、こうした状態から離脱させるものではない、ということである。つまり、プロレタリアートの行動や、危機に対するプロレタリアート自身の反応は烈しさと強さにおいて、危機そのものよりも、はるかに遅れるということの方が、重大なのである。」（『組織論』P三〇）

このようなことを確認することによって、ルカーチは、メンシェヴィズムの基礎とし、そして、ポリシエヴィズム型党の必要性を語るるのであるが、しかしながら、ルカーチの内容から帰結するのは、「プロレタリアートのイデオロギー的危機」ということのみであり、

意識的な第一歩とされ、そして、全人格と傾注といった問題が、この自由の国との関係で論じられるのである。

「かくして、自由の国を意識的に志向することの意味は、事実上この国を実現する処置を、意識的に採るということにほかならない。また、自由の国を意識的に志向することには、次のような見解に基づいて、まさに個人的自由の放棄を意味するのである。すなわちその見解とは、今日のブルジョア社会における個人的自由は、非連帯的に他人の不自由を踏台にしているがゆえに、すでに墮落した、しかも人を墮落させる特権たりうるのみである、というものである。」（『組織論』P五七）

プロレタリアートのイデオロギー的変革に党の根本を求めたルカーチは、党の組織規律の問題をも、この観点からみているのである。だから「人間意識の物象化を打破するための処置」の前提として「人はその全人格をそれに傾けなければならぬ」（P六五）ということになり、「すべての黨員が、全人格を傾けて無条件的に、運動の実践に専念することが、つまり共産党の規律が、真実の自由を実現するためにとりうべき、唯一の方法」（『組織論』P六六）といったことが確認されるのである。

だが、このような党規約に対する解釈が正しくないのは、自由の国との関連で党規約を位置づけた場合、現実の党の運営にとつては何の具体的な基準にもならないことである。なぜならば、自由の国といった内容自体があいまいであつて現実に生起する問題を処理することは出来ないのである。われわれは、この問題に関しては、資本主義批判をふまえた上で、ブルジョア国家権力との戦闘組織としての党を権力奪取に向けての闘争を基準に具体的に検討されねば

それゆえ、このように問題をたてるならば党の問題を「プロレタリアートのイデオロギー的変革」とか「プロレタリアート自身の歴史的地位を、プロレタリアート自身が、正しく認識することである」（『組織論』P四五）といったことに解消してしまうのである。

そして、ここでは、イデオロギー的危機をどのようにのりこえるか、ということが、抽象的に語られているのみであつてレーニン主義の核心的内容は把握されていないのである。何故なら、レーニンは、このようなプロレタリアートのイデオロギー的危機を呼びたてるかわりに、それを克服する現実の道を、武装蜂起にむけた政治闘争の組織化として、いわゆる全面的政治暴露として提出しているにもかかわらず、ルカーチは、この具体的な内容を、「プロレタリアートのイデオロギー的危機」といった抽象的な空語におきかえることによつて、レーニン主義を理解したつもりになっているのである。

「組織問題と自由」という項では、共産党の規約、規律についての考察であるが、ルカーチの小ブル的立場はここでは一層明確になっている。

「メンシェヴィキの党が、プロレタリアートのこうしたイデオロギー的危機を、組織的に表現したものであるとすれば、共産党は共産党として、この飛躍への意識的な助走のための、組織的な形態である。したがつて、それは、自由の国への意識的な第一歩である。」（『組織論』P五五）

階級闘争の歴史を具体的に把握しえず、せいぜい、資本主義社会の崩壊の必然性を論証するものとしてしか考えていないルカーチにあつては、ブルジョア階級の打倒とその国家権力の粉砕とをこえて、自由の国を論じるのである。その結果、共産党が自由の国への

ならないと考えている。

「組織と党と大衆」の項では、共産党の組織上の独立の問題がとりあげられている。ここでもルカーチは、プロレタリアートの階級意識の発展過程の問題に解消し、その政治的内容に関してはふれられていない。実際、階級から組織上の独立をしていない「党派」などは存在しないわけであつて、どのような内容と形態でもつて、階級と結合されているか、ということこそが問題であるにもかかわらず、階級意識の発展過程の問題から、共産党の組織上の独立の意味を解釈しているのである。

「共産党の闘争は、プロレタリアートの階級意識のために行なわれる闘争である。このばあい共産党が、階級から組織上分離しているのは、党が階級そのものの代りに、階級の利害関係のために闘争しようとするということを意味するものではない。共産党がかりに、こうしたことをやるにしても……階級意識の発展過程を進め、かつ速めるためになされるのである。……共産党の組織上の独立は、いったい何のために必要であるか。それはまずプロレタリアートに、自分自身の階級意識を歴史的形態として、直接的に認識させるためである。次にそれは、日常生活のあらゆるできごとに関して、階級全体の利益の要求する態度をはっきり、かつすべての労働者に分らせるためである。最後にそれは、階級としての独自の存在を、全階級に意識させるためである。」（『組織論』P八〇—八二）

ルカーチは、共産党のプロレタリア階級からの組織上の独立について種々の考察をしたあと、その独立が何のために必要かと問い、平凡な結論を得ている。このことから出てくる結論は、党の階級からの独立といった問題に関して色々考えをめぐらせても、何の成果

もあがりはしないということである。むしろルカーチは、この独立の内容が、種々の党派によってどのような政治的・構造的な相違があるのか、という具合に、具体的に問題を提出すればよかったのである。

にもかかわらず、ルカーチは、一般的・抽象的に問題をたてた結果、「共産党は、プロレタリア階級意識の独立した形態である」(『組織論』P八九)といった結論を得て何かを解明したつもりになっているのである。われわれは、党について語る場合、党とは何かといった問題提起自体が成立しえない(正しい解答を与えることが出来ない)ことをはっきりさせておかねばならない。われわれが問題にしなければならぬのは、党の綱領であり、世界観であり、戦略・戦術であり組織である。党とは何か、という問は、このような具体的な内容について全て解答を与えた後に解答しうるものであり、それゆえ、アプリオリに党とは何かという問を發しても、答えることが出来ないのが当然である。だが、ルカーチは、この禁断の間に答えた結果、実際に必要な党の具体的な内容から一切無関係な地平へと昇天してしまったのである。

「組織と党内規律」という項では、共産党の党内規律についてふれられている。

「資本主義が存続するかぎり、人間の内面的変革を期待することは全て空想主義的な幻想である。といてよいであろう。ただそのために、次のような組織上の予防策および保障を探し求めて、現実これに獲得しなければならぬ、ということになるのである。要するにそれは、こうした事態の、人を墮落させるような結果がおこるのを阻み、そして、不幸にして、そうした結果がおこったば

あいは、直ちにこれを是正し、さらにそれが生んだ弊害を除去しよう、組織上の予防策および保障のことである。」(『組織論』P九九)

ルカーチは、党の規律を「資本主義的遺産にたいするふだんの闘争」ととらえている。そして、ブルジョア的墮落の予防手段として、規律を考えているのである。だが、党内分派の政治的色彩という問題に一切ふれず、規律一般を論じること全く誤りである。

以上みてきたように、ルカーチの組織問題に対するアプローチは、レーニン主義とは無縁な地平において行なわれたものであった。その根本原因は、ルカーチの問題のたて方そのものに求めることが出来るが、われわれとしては、ルカーチが、主観的には、理論の実践への転化を意図しておりながらも、しかしながら、その理論上の欠陥(物象化論にみられる資本主義批判の誤り)によって、このような意図が決して実現されず、具体的な問題を検討する度に、ますます、抽象的・無内容になってしまったことが確認されればよい。そしてその原因は、プロレタリアートの革命性の根拠を、資本主義批判において明らかにせず、歴史に求めてしまったことにあり、この歴史を論理化することによって、具体的な現実から遠ざかり党を階級意識に昇華させてしまったことにあるのである。

(五) 第二インター左派によるレーニン主義の解釈にとどまる『レーニン論』

すでにわれわれは、ルカーチの理論内容を全面的に検討してきたのであるが、最後に、『レーニン論』に則して、ルカーチの、哲学的・経済的・政治的誤謬に関してまとめてゆきたい。まず、哲学的な

誤謬からはじめるとすれば、ルカーチは、『レーニン論』の第一章で、史的唯物論がプロレタリア革命の理論であると述べ、さらに、レーニンの基本思想が「革命の現実性」にあったとし、そして個別と全体とに関するルカーチ独自の弁証法によって、レーニンが何故マルクス主義を具体化しえたか、という問題を解明しようとしている。

「史的唯物論はプロレタリア革命の理論である。なぜなら、その本質は、プロレタリアートを生みだし、プロレタリアートの全存在を規定している、かの社会的存在の思惟による総合だからであり、またなぜなら、解放をめざして苦闘するプロレタリアートがその明確な自己意識を史的唯物論に見出すからである。したがって、プロレタリア的思想家の、史的唯物論の代表者の偉大さは、この問題に對する彼の洞察の及んだ深さと広さとで測られる。つまり、ブルジョア社会の諸現象のなかで、そしてそれを通じて活動的存在となり明確な意識を獲得するにいたるプロレタリア革命へのあの諸傾向を、彼がどれだけ強力にそれら諸現象の背後から正しく洞察することが出来るかで、彼の偉大さは測られるのである。」(『レーニン論』P七、青木版)

『歴史と階級意識』においては、「歴史的生成の立場」とか「プロレタリアートの立場」とかいう言葉によって語られてきた内容が、ここでは、史的唯物論として語られ、そしてそれが、体系づけられてプロレタリア革命の理論として提出されている。ところでルカーチによれば、史的唯物論の本質とは「プロレタリアートを生みだし、かの社会的存在の思惟による総合だからである」というものであるとされる。これは正しくない。

史的唯物論なるものは、あくまでも唯物論的な歴史の見方という

次元で把握されるべきであって、一個の体系と把握されるはならない。ルカーチは「思惟による総合」としてその本質を語ることによって、史的唯物論を一個の理論体系であると考えているのでありなおかつ、その内容は、プロレタリアートの革命性の解明としてあるとされているが、このことは、すでに述べてきたように、誤まれる資本主義批判に基づいた、歴史の論理化であり、歴史における觀念論への転落であった。

だから、ルカーチの念頭においている史的唯物論とは、「ブルジョア社会の諸現象のなかで、そしてそれを通じて活動的となり、明確な意識を獲得するにいたるプロレタリア革命へのあの諸傾向」の洞察とされており、商品の自己意識から、階級意識に高まるプロレタリアの意識を、商品構造とその運動、すなわち、プロレタリアの主体の分裂・内容矛盾の論理として把握することに他ならないのである。このような史的唯物論の把握の仕方は、すでにみてきたこととく、歴史を、階級闘争の歴史的教訓の解明として具体的に分析し、その成果によって実践の基準を明らかにすることではなく、なにか一つの論理体系へと歴史を抽象化し、そのことによつて、理論と実践とを対立させてしまい、その結果、理論と実践とを媒介するものが組織であるといった考え方に陥ってしまうのである。

ところで、史的唯物論をこのようにとらえているルカーチは、次に、レーニン主義の基本思想について、次のように語っている。

「革命の現実性、これがレーニンの基本的思想であり、そして同時に彼をマルクスと決定的に結びつけている点なのである。なぜなら、プロレタリアートの解放闘争の概念的表現としての史的唯物論が理論的にも把握され定式化されるのは、その実践的現実性がす

でに歴史の日程にのせられた、歴史的瞬間においてだけだからである。〔レーニン論 P 一〇〕

「革命の現実性が一つの時代全体の基調を規定する。社会的・歴史的総体の精確な分析によってのみ見出すことのできる。この中心へと個々の行動を関連づけてはじめて、個々の行動が革命的なものとされたり、あるいは反革命的なものとされたりするのである。革命の現実性は、したがって、あらゆる個別的な現実問題を社会的・歴史的総体の具体的関連において取り扱うことを、また現実問題をプロレタリアート解放の契機とみなすことを意味する。〔レーニン論 P 一二〕

ルカーチは、革命の理論（史的唯物論）を実践に転化したことを、レーニンの偉大さとしているが、この理論を実践へ転化せしめた要素として、「革命の現実性」を主張しているのである。

ルカーチは、「歴史と階級意識」においては、客観的実在を、歴史的生成の立場からみるプロレタリアートの立場に関して考察していたが、ここでは「革命の現実性」が、理論を実践的な方針へと転化するための契機とされるのである。このようにレーニン主義を把握した場合、結局、次の様な評価にとどまってしまうのである。

「正しい認識を現実問題全体の、政治経済的・理論戦術的、煽動的組織的問題の確固とした方針にすることが出来なかつた。いまだ完全に実践的になつたマルクス主義を具体化するための、こうした措置を遂行したのは、レーニンただひとりであつた。〔レーニン論 P 一三〕

要するに、正しい現実認識に到達した人々は、第二インターの中にもいたけれども、この認識を、方針化することが出来たのは、レ

ーニンのみであつたとされるのである。このようなルカーチの見解は正しくない。何故ならば、このような見解からは、第二インター内の、中間派（カウツキー）及び左派（ローザ）の理論は正しいけれども、それを方針化しえなかつたことが誤りであるという結論が導かれるのであるが、これは、日和見主義を免罪するものでしかない。むしろ、第二インターの理論家達の理論は、方針に具体化されないような理論的欠陥があつたことが鋭く突き出されなければならないのである。

さらに、このような見解からは、党派闘争に関して、全くの軽視に陥ることである。ルカーチの見解からすれば、レーニンの党派闘争は、理論をたんなる理論として終らせてしまふのか、それとも、その理論を方針へと具体化するのかという点をめぐつて闘われたことになつてしまふ。しかしながら、このようなことも正しくないのである。日和見主義者も、日和見主義者なりの方針をもつていてのである。だから、日和見主義者との党派闘争は、まさに方針をめぐつて闘われるのであつて、単に「正しい方針」を提出すればよいといったことではないのである。まさに、「正しい方針」を実現するためにも、日和見主義者の方針との激しい党派闘争が必要なのであり、このことをレーニン自身も「左翼小児病」において述べている。（ルカーチは、この本を読んでいるにもかかわらず、党派闘争に対してほとんど理解していない。）

このようにみれば、結局、ルカーチのように、レーニンの基本思想を「革命の現実性」に求めることも誤りであることがはっきりする。ルカーチは、「革命の現実性」という言葉の意味を、理論を方針にまで具体化するための条件として考えており、そして、レ

ーニンが「革命の現実性」という立場から、現実を分析することによって、正しい方針を導きえたということを主張しているのであるが、このような考え方は、理論そのものが自立的に存在しつづつ、一方その理論を実践の方針に転化するためには、種々の価値判断が、必要であり、「革命の現実性」という価値判断が、唯一正しい方針を導きうるという主張であり、この論理構造は、すでに批判してきた

「プロレタリアートの立場」論と同じである。すなわち、ルカーチは、プロレタリアにとつても、ブルジョアにとつても、資本主義社会の商品構造という「客観的実在」は不変であるとし、経済情態における両者の差異から生ずる価値判断が、プロレタリアートの場合は、主・客の同一性として「歴史的生成の立場」に立ちうるのに対し、ブルジョア思想は、現実そのものを固定化して把握するがゆえに、商品構造が生み出す物神性を見破れず、したがってプロレタリアートのみが、革命的階級となりうる、といったことを主張してきたのであるが、ここでも、理論そのものの自立性と、それを実践に適用する場合の観点としての「革命の現実性」という具合に、認識主体の立場を問題にしているのである。だが、すでに「プロレタリアートの立場」を批判したようにこのような考え方は、資本主義に對する理論が自立して存在しうる（何故ならルカーチは資本主義社会を商品構造と考えているから）ということを基礎にしているが、このことはわれわれの資本主義批判によって、誤りであることは、もはやここでは繰り返すまでもないであらう。

われわれは、むしろ、資本主義社会に對する理論の自立性は、資本主義の物神性の産物であり、資本制的生産様式が日々再生産して

レーニン主義の根本問題も、ここに存在するのである。以上、われわれは、ルカーチの哲学（理論と実践）―それはルカーチの誤まれる資本主義批判の産物であるが、―の誤謬をもちたつたものとして批判してきた。次には経済上の誤りについてふれなければならない。

ルカーチは「レーニン論」第四章で帝国主義論に関する見解をのべている。主要には、ローザ・ルクセンブルグの「資本蓄積論」とレーニン「帝国主義論」とを対比させつつ、帝国主義と民族問題、ブルジョア革命とプロレタリア革命、帝国主義と労働運動・修正主義の批判、等について展開している。まず、ローザの「資本蓄積論」に関して次のようにその意義と限界がのべられている。

「ローザ・ルクセンブルグは、帝国主義の経済的複合体全体を資本主義の再生産過程の必然的結果として叙述することにさえ成功した。すなわち、帝国主義を史的唯物論の歴史理論のなかに有機的に組み入れ、そしてそれによって崩壊理論に具体的―経済的基礎を与えることに成功したのである。〔レーニン論 P 五二〕

「ローザ・ルクセンブルグは、卓絶した方法で、（資本の）蓄積過程が帝国主義へと移行したために、植民地の販売領域と原料領域とをめぐり、資本輸出等をめぐり闘争の時代が不可避になつたということ、この時代―資本主義の最後の階段―は世界大戦の時代にならざるをえないということを、示している。だが彼女もまた、この理論から現代の具体的な諸要求への移行を見出すことはできなかった。〔レーニン論 P 五二〕

ルカーチは例によつて、ローザの経済理論そのものは正しく、むしろレーニンよりも優れているけれども、しかしローザは、彼女の理論を、現実の具体的要求へと移行させることが出来なかつた、と

いうぐあいに評価している。さて、われわれは、すでに、このようなルカーチの発想法そのものは、十分批判してきたので、ここではルカーチが支持を表明しているローザの経済理論そのものを検討してゆくことにしよう。その前に、ローザと対比してレーニンが評価されているが、それは、次のようなことである。

「レーニン帝国主義論は多くの点でヒルファアディングにもとづいて書かれており、純粹に経済学的に見た場合には、深さと規模の大きさとにおいて、ローザのなしたげたマルクスの再生産理論の驚くべき展開にくらべるべくもない。レーニンの優越性は、つぎの点——そしてこれが無比の理論的偉業である——にある。すなわち彼は帝国主義の経済理論を完全に現代のあらゆる政治問題と具体的に結びつけることに成功し、新たな段階の経済学を、まさに決定的な状況における具体的行動全体の規準とすることに成功したのである。」（『レーニン論』P五二）

「レーニン帝国主義の理論は、——ローザのような——帝国主義の経済的に必然的な成立とその経済的制限との理論であるよりは、むしろ帝国主義によって解放され、帝国主義のうちに作用している具体的な諸階級諸力の理論、すなわち帝国主義によって出現した具体的な世界情勢の理論である。」（『レーニン論』P五四）

要するに、レーニンの偉大さは、帝国主義の理論を、政治問題とむすびつけ、具体的行動の規準とすることが出来た、ということに求めている、そしてルカーチは、レーニンにあつては、「帝国主義の経済的に必然的な成立」の論証は、ローザに比べておとつていてと評価しているのである。

さて、以上のようなルカーチのレーニン評価を確認したうえにた

の必然性」ということは、言いかえれば、帝国主義は何故成立したか、その根拠を問うことになるのであるが、このことが、「どのようにして帝国主義が成立したか」ということから切りはなされてしまふならば、それは宙に浮いた議論になってしまうのである。ローザの『資本蓄積論』は、この帝国主義がどのようにして成立したかという内容を、独占と金融資本の成立として把握することなく、この問題に全くふれずに、再生産方式から問題を説明しようとしたのであり、これがローザのつまづきの第一歩であつた。

さらに、内容的に言うならば、ローザの、資本制的生産様式、とりわけ、その「自立性」に関する把握が批判されねばならない。ローザは、「資本蓄積がその物象的諸要素において事実上いかに甚しく非資本制的領域に縛りつけられているか」ということを強調するのであるが、このことは、現実の資本蓄積が、単に、資本制的生産様式のみならず、直接的現実を描写するかぎりでは当り前のことであるが、しかしここから、論理的にも資本蓄積が非資本制的領域に縛りつけられているという結論をだすことは出来ない。ローザは、具体的現実から直ちに、論理的帰結をひきだしているが、ここから逆に資本制的生産様式の自立性（商品を生産するばかりでなく、資本家と労働者を生産する）を見失なってしまうのである。その結果、逆に非資本制領域の存在が制限されるならば、資本蓄積をも制限されるのではないか、といった考えに陥るのである。

だが、このような考え方が誤りであるのは資本制的生産様式と非資本制領域との関連を明らかにするときに明白となる。実際、資本制的生産様式は、その論理的自立性を根拠にして、非資本制領域を自らの下に体系化しているのであつて、非資本制領域をも資本蓄積

つて、経済理論そのものの検討にうつらう。周知のように、ローザは、『資本蓄積論』において、『資本論』第二部の再生産方式を検討し、再生産方式が、純粹資本制領域に問題を限定していることを批判しつつ、それを非資本制領域をも含めた全体へと拡張し、非資本制領域（農業・植民地等）を、資本制生産様式の自立のための条件とするのである。このような観点から、「軍国主義」をも、資本蓄積の条件とされ、そして、「軍国主義」の矛盾は、資本が「軍国主義」によって外国及び本国で、非資本制的な諸層を排除し、そのことによって、資本制生産様式の蓄積の諸条件を自ら破壊し、破局を迎えざるをえないといったことが結論づけられるのである。（ローザ『資本蓄積論』の誤謬に関しては、別の機会に論じられるであろう）

こうしたローザの方法と内容は、一見して、レーニンのそれと區別しうるのであろう。レーニンは、資本の集中、集積による独占資本の形式を、金融資本の特質から分析し、そして帝国主義を、国家の政策としてではなく、金融資本がとらざるをえない運動形態として、帝国主義の経済的基礎を説明したのであつた。

まさに、ルカーチが要約しているように、ローザは「帝国主義の経済的に必然的な成立とその経済的制限との理論」を説明しようとしたのであるが、そのような問題のたて方そのものが批判されねばならない。なぜなら、帝国主義とは、現実存在しているのであつて、レーニンの如く、この帝国主義を経済的基礎から説明するといった作業を進めるのではなく、いきなり「帝国主義成立の必然性」とか「崩壊の不可避性」といったことを論じようとすれば、それは空虚な抽象の世界へ昇天せざるをえないのである。「帝国主義成立

の結果として、自から再生産するのである。これが両者の関連であつて、だから、非資本制領域が、資本の蓄積に影響を与えるように見えるが、それは量的なものではない。それゆえ、非資本制領域の制限から、資本蓄積の制限を論理的に主張するのはあやまりである。たとえば、ソ連・中国等が、資本主義世界市場から脱落したことをもつて、直ちに、資本蓄積の制限をとくことは出来ないように。結局、このようなローザの理論には歴史の論理化といった指向がはらまれており、ルカーチの理論に対する考え方の弱点と同じものが含まれているのである。したがつて、われわれは、ローザやルカーチの経済理論からどのような政治的、具体的方針が導かれるかを明らかにし、そのことによって、ルカーチのレーニン評価・理論を具体的な方針に結びつけた、といったことの誤りを明らかにしよう。要するに、ルカーチの評価とは逆に、レーニンは、理論内容においても、ローザや、カウツキーとは異なっていたのである。

まず民族問題に対する評価である。周知のように、ローザは、民族自決のスローガンに反対し、レーニンと論争したが、その根拠は、帝国主義時代においては、民族独立戦争は、どこかの帝国主義勢力によって利用されており、このような帝国主義の努力を助長するものと把握していたことであつた。このようなローザの民族独立運動に対する軽視は、彼女の経済理論によって裏づけられていたのであるが、今日、このローザ理論は、裏返しにされて復活した。すなわち、ローザ理論の骨子は、非資本制領域の制限から資本蓄積の制限をとくことにあるのであるが、この理論を、ローザの如く、帝国主義国の革命党の立場に立てば、「軍国主義」が、資本蓄積の条件自ら崩壊させるものとして、民族独立運動はむしろ「軍国主義」のあ

の媒介において、そして組織の媒介を通して、はじめて具体性と現実性とを獲得するのである。」(『組織論』P一六)

理論と実践とを媒介する形態は組織である、という風に言われて納得してしまう人がいるならば、その人は、組織問題を、単に形式的に、抽象的に理解しているにすぎず、実践的には解党主義に組するものである。ルカーチ組織論の限界も、その根本はこのように問題を提出したことにあるのである。たしかにこの命題はよく出来ていよう。この命題に対して色々反論してもそれは決して成功しないであろう。何故ならば、本来組織問題は、理論と実践との媒介といった抽象的な次元で問題にされるべきものではないにもかかわらず、しかし一旦、このような抽象的な次元で問題にされると、抽象の世界の中で論理的に完結してしまい、一見正しい内容を物語っているかの如く見えるのである。

だが、このルカーチの命題は、われわれが次のように問題をたてるときに、ガラガラとくずれ去り、ルカーチが抽象の領域で思惟をめぐらせたこの高層建築が、何の役にも立たない砂上の楼閣であることに気付くであろう。そして、組織問題にアプローチする場合にこのようになわれわれの問題のたて方のみが正しいとすれば、ルカーチの提起は、やはり、彼自らが克服しようとしている第二インテンタルの発想の枠内にあることが明らかとなるのである。

われわれの問題のたて方とはこうである。ルカーチが、理論と実践を媒介する組織、という具合に、理論一般、実践一般を問題にしているのに対して、われわれは、どのような理論か、どのような実践か、と、具体的に問うことである。そして、ルカーチのような問題提起が生れてくるのも、どのような理論に裏づけられているかを

の「理論」をどのように「実践」に転化させるかに頭を悩ませ、そして、この媒介に「組織」を得て体系を完結しえたのであった。だが、われわれにとっては、実践の基準を明らかにするものとして理論を考えてゆかねばならないのであり、理論一般が実践に転化するといった考え方は、実践の基準としては、何も明らかにするものではないことを確認しなければならぬ。すなわち、プロレタリアートの革命実践の根拠を明らかにするものとして、資本主義批判がうちたてられるならば、あとは実践の基準を明らかにすべく階級闘争の歴史を理論的に解明することが理論の任務となるからである。だが、資本主義批判からプロレタリアートの革命実践の根拠を明らかにしえず、せいぜい資本主義社会の見取図を理論一般としてしか描けない人達が、階級闘争の歴史のなかに、プロレタリアートの革命実践の根拠をさがし求め、その結果、歴史を理論に解消し、プロレタリアートの実践に害毒を流すことになるのである。

ルカーチの問題のたて方は、とりわけ、彼が第二インテンタル内の種々の日和見主義者を批判する際に、その誤謬が鋭くあらわされてくる。「いうまでもなく誤りは、理論の中や目的設定の中にも、また状況そのものの認識の中にもありうる。それにもかかわらず、理論に対する実践の見地からの有効な批判を可能ならしめるものは、ただ組織という観点からの問題提起だけである。」(『組織論』P二〇)

「要するに、第二インテンタルに属するあらゆる急進的党派(ただしロシアの党派は除くが)の弱点は、それらがみずからの革命的立場を組織上に具体化できなかった、もしくは具体化しようとしなかった、という点である。……(この左派の態度は、中間派をして理論的には左派と同様の態度をとることを可能にした。中間派は)……

明らかにすることである。

ルカーチが、理論一般が成立しようと考えているのは、彼の理論内容そのものからの帰結である。すでにみてきたように、ルカーチは「(マルクス主義の見方にとつてすら)客観的現実は何ら変らなない。ちがっているのは、まさにこの現実を批判する観点なのであつてこの価値判断こそがまさしく新しい重要性をおびてくるのである」(『歴史』P一四九)というように考えており、だから、この客観的現実を反映する理論一般と、それを両階級の経済的生活条件から発生する「立場」とが存在することになるのである。だから、ルカーチにとっては、ブルジョア階級の立場とプロレタリアートの立場とを比較検討することが重要な課題となつたのであつた。

だが、すでにみてきたように、ルカーチのこのような理論に対する考え方および理論内容そのものは、労働者階級と資本家階級との経済的関係を、商品交換関係に解消するところの誤まつた資本主義批判のもたらすものであつた。すなわち、両階級の間の経済的関係を、現実には、二つの経済的行動として実存しているにもかかわらず、これを一つの過程と見てしまうことによつて、理論一般が成立するかの幻想に陥つていたのである。このように、一つの過程を、両階級のふたつの経済的行動として把握しえず、単なる一つの過程と見てしまうことによつて、ルカーチは、両階級の「立場」なるものを問題にせざるをえず、他方、この「立場」なるものは、何も明らかにしえないが故に、「歴史」に救いを求めざるをえなくなつたのであつた。

ルカーチは、「理論」を、このように両階級の行為を捨象した一つの過程、具体的には商品構造の分析として考えているが故に、こ

例の旗色鮮明な修正主義を攻撃すると同時に、革命的行動をとらうとする主張をも攻撃するという態度であり、さらに修正主義を理論的に否定しながらもそれを党の実践から遠ざけようと真剣に考えない態度である。そしてまた、革命的行動をとらうとする主張を、理論的には肯定しておきながら、それは現在のところは、現実性がないうちがうように、と主張する態度である。このばあい、時代の一般的に革命的な性質だけは、すなわち、革命の歴史的現実性だけは、これを洞察することができたが、しかしこの洞察を、現在の決意に具体的に適用すべし、という強制的要請は生じなかつたのである。」(『組織論』P二三)

ルカーチの問題設定からすれば、理論と実践とを媒介するものが組織である以上、この組織という観点から問題をたてない限り、理論的に正しくとも実践することはできないということになり、この観点から第二インテンタル諸派を総括してゆくのであるが、その際、左派は、自己の革命的立場を組織上に具体化しえなかつたことがあげられ、そして、その結果、左派と中間派(カウツキー)との区別が明らかにならず、中間派を解体しえなかつたことが述べられている。だが、このような総括の問題点は、中間派の理論そのものは正しく、ただ、それを組織の観点から提出することが出来なかつたことという具合に述べられることによつて、中間派及び左派の理論的な誤りに気が付かないことである。だからルカーチが、ボルシェヴィズムとメンシェヴィズムの分裂の契機が組織問題にあることを指摘しても、この指摘そのものは正しいけれども、その内容たるや、レーニン主義とは無縁なしろものになってしまうのである。

ルカーチは、「レーニン」なにをなすべきか』を念頭におきつつ、

党の基準を、革命闘争一般との関係に求めてしまふ。

「組織は革命的行動の前提をなすというふい——カウツキーによつて代表される——把握も、組織は革命的大衆運動の所産であるという、あのローザの把握も、一面的で非弁証法的であるように思われる。革命を準備する党の機能は、この機能から同時にそして同じ強さで革命的大衆運動を作り出すものおよびその所産を、その前提およびその成果を作る。」(「レーニン論」P三九)

「しかし大衆は、行動においてのみ学ぶことができ、その利害の闘争においてのみ自覚することが出来るのである。闘争の経済的・社会的基礎はたえず変転するために、闘争においては闘争の諸条件と手数は間断なく変化する。プロレタリアートの指導政党がその使命を果すことができるのは、闘争のなかで闘っている大衆よりもつねに一步前進し、彼らに道を指し示すことができるだけである。とはいえ、いつも彼らの闘争の指導者となっていることが出来るのは、つねに一步前進しているときだけである。」(「レーニン論」P四二)

レーニンにあっては、プロレタリア独裁を実現すべき、蜂起との関係で、党の基準が提出されてきたにもかかわらず、ルカーチは、この権力問題をあいまいにし、革命的大衆運動と党との関係のみがとりだされ、そこから大衆運動から、つねに党が一步前進していることが、党の条件とされるのである。

このような党に対する考え方は、われわれの実践との関係で論じるならば、六〇年安保以降の局面において、党建設の問題を、個人の主体性に求め、現実の階級闘争から召還してしまった革共同に対して、安保闘争の伝統の継承として、関西ブンドによって「政治過程

論」として論理化された。それは、党の問題においてはルカーチに

依拠しつつも権力問題に関しては、ルカーチよりも前進しており、ブルジョア権力に対する政治闘争を組織する指針たりのであった。だが、党の問題に関するルカーチへの依拠は、権力問題に関するルカーチの弱点をまぬがれることは出来なかった。ルカーチが、権力をブルジョア社会(市民社会—国家論)ととらえたのに対し、関西ブンドは、国家権力にしばらくあげたのであるが、その結果、やはり関西ブンドも、権力問題を抽象的に提出したのみで、具体的、実体的に解明することが出来なかったであつた。

しかし、六九年階級闘争がつけつけた武装蜂起と非法党建設の問題は、われわれをしてこのような思想の総括を鋭くせまらしめたのであつた。資本主義批判を立脚点としたわれわれの党に対する考へ方の転換は、その過渡期には党母胎論的傾向をほらみながら非法党建設の実践のなかで、ダイナミックにおし進められた。

このわれわれの実践からすれば、ルカーチの思想は、合法主義の限界にまで登りつめた合法主義であり、その意味では、第二インタ—の思想の極点であると共に、そこからレーニン主義へと転換さるべき転換点をなすものといえる。そして、この転換の基準は、理論的には資本主義批判であり、実践的には、非法党の建設である。

(追記—この論文は、まえがきにもあるように、第二次ブンドの分派闘争において、戦旗派と分離し、12・18ブンドを結成して以降、革共同の理論に対する批判的作業の一環として準備されたものであつた。

それゆゑ、言うまでもなく、論文全体の水準は、12・18ブンドの理論的・政治的な水準にとどまっている。これ以降の、12・18ブンドにおける新たな分派闘争と、共産主義者同盟(RC)の建設に関しては、「序章」九号「革命階級闘争の組織の原則問題」や、「赤報」各号を参照されたい。

序章 社近刊案内

反米愛国戦士書簡集

九月上旬刊予定

A5判 三〇〇頁
予価 四八〇円

〈主要内容〉

川島豪、渡辺正則、中島衡平氏ら獄中反米愛国戦士の、一九七一年二月から一九七二年二月にかけての書簡。「統一赤軍」結成前後の経緯とそれがもつ意味とを説明するの不可欠の資料。他に、論文数編、坂口弘氏の手になる〈総括文〉を収録。

〈はじめに(発刊の辞)〉より

この「書簡集」は、一九七一年二月から一九七二年二月までの反米愛国戦士の獄中書簡を集めたものである。

建軍武装闘争を切り拓きながら、不当にも逮捕された反米愛国戦士は、獄中におかれていても米日反動派と闘い、誤りと闘った。とりわけ、重大な誤りと敗北をなした一部旧指導部の日和見路線と非妥協的に闘った。この闘いは極めて重要な意味をもっている。この闘いがなければ、我々は現在のように固く団

結できなかったであろうし、敗北の科学的総括をなしうることなど到底できなかったであろう。

もちろん、この闘いは決して十分なものではなかったし、敗北してしまつた闘いである。それは主に、獄中のため事実がほとんどわからなかったこと、一部旧指導部が意識的に偽りの報告で終始したことによるものであるが、一方、獄中戦士自身も十分性をもっていたことも確かである。

だが、反米愛国戦士の指摘は正しかった。誤りを見抜いていた。この指摘の中にこそ、勝利への道があつたのである。

「あなた達の真剣で建設的な批判に謙虚に耳を傾けていたならば、このような悲惨な結果には至らなかつたと今では確信しています。」(坂口弘氏、「謝罪と闘争宣言」)

この「書簡集」自体、十分なものではない。一部旧指導部への批判と忠告の手紙の大部分は失なわれているし、その他かなりの部分を削除せざるをえなかつた。しかし、「連合赤軍」の科学的総括のため、これは絶対に欠かせないものであると確信する。

一九七三年五月一日